

成田勝浩の ロンサム・エアポート

第二百拾貳話
「登山」



私は何故山に登るのか。そこに山があるからではない。メタボ対策である。

茨城県つくば方面へ用事があり、つくばと言えば筑波山と思い立ち、用事の前に前泊し筑波山登山を執行することにしたのだ。麓の筑波山神社の近くの駐車場に車を止め、ここから山頂を目指す。筑波山山域は神社の神域で全体がパワースポットといわれている。世界的なパワースポットのセドナへ行っても(2014年7月号「エッセイ」)未だ特筆すべきパワーを感じたことのない私は、今度こそ神秘体験ができるのではないかという思惑もある。

山頂まではケーブルカーで行けるのであるが、当然自力で上る。今日は天候に不安がある。装備は万全である。私はモンブランに登頂した男である。(2018年5月号「モンブラン」)アルピニストと言ってもよいだろう。トレッキングシューズに履き替え、雨具や予備の衣服もザックに入れる。水は2?も用意した。今日は暑い。だが重たい。山頂では各種ドリンクが購入できるのは分かっているが、絶対山頂価格であろう。コンビニでおにぎり、菓子パンなども調達。山頂では名物つくばうどん等魅惑の食事ができることも知っていたが、絶対山頂価格であろう。非常用としてチョコレートや飴も用意。このチョコを食べてしまったら、メタボ対策が無になる。

樹林の中を登山開始。木々の香りがアロマ効果となり不安やイライラを取り除く。なんてことはない。日頃の不摂生もあってすぐに大量の汗が噴き出す。重い水を減らしたいので、「水を飲む→汗が出る」の負のループに。いやメタボには効果絶大だ。脇を走るケーブルカーに苛立つ。

息を切らし、2時間ほどで、やっと山頂(ケーブルカーの駅)に到着。これまでの苦難を忘れさせるような絶景が広がり、得も言われぬ達成感。なんてことはない。霧で真っ白だ。ウエアから汗を滴らせている私と対象的に、涼しい表情の軽装の人々。家族で山頂価格のランチを食べている。いずれにせよこの汗まみれでは食堂に入る気はしない。とりあえずおにぎりをひとつだけ食べて先を急ごう。予報どおり雨が降ることは確実だ。

私の緻密なプランでは男体山と女体山の2つの頂を縦走してから下山する。女体山への途上で雨が降ってきた。すでに汗でびしょ濡れであるし、下山後車ですぐに着替えればよい。女体山山頂の花

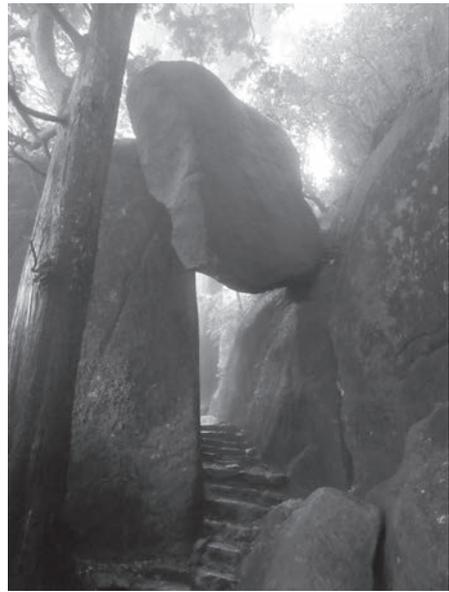


Photo by Katsuhiko Narita

パワースポット

崗岩は雨で滑りやすく、スリップして尻もちをついた。下山ルートの上には、信仰の対象となった奇岩スポットが複数ある。これは慎重を要する。

地図を見た時、何でここは短い距離なのに40分というコースタイムなのか疑問に思ったが、理由が分かった。急な下りのうえに滑りやすい花崗岩上で、確保が難しい。スニーカーだったら無理だろう。昼間とは思えないほど暗くなり、水滴がメガネにつき視界が悪い。両手を使いつつゆっくり下る。手袋も必要だったか。「こんにちは。」よく見えないが下から声が聞こえる。この挨拶という山でのルールは苦手という人も多いが、この状況下で無言だったら、怖いだろう。「私は遅いので先に登って下さい。」とオトナの余裕を見せる。途中薄暗い中に現れた奇岩は神秘的ではある。岩の間を覗き振り返ったら人がいた。びっくりしたあ。相手はいきなりずぶ濡れの人が現れたので、もっと焦ったようである。努めて明るく「こんにちは!」

下山後、無事に登山を終えた感謝を込めて筑波山神社をお参り。今日の気づきを振り返った。登山の何が面白いのか。私はインドア派であった。ブルーグラスフェス=野外という固定観念はやめてほしい。家族連れは山頂価格を厭わない。落武者の霊は私のことであった。挨拶は大切。低山をなめるな。